

日蓮大聖人御書全集

しじょうきんごごしよ

四糸金吾御書

新版
1598
ゝ
1601

四条金吾御書

けんじ

ねん

がつ

にち

さい

しじようきんご

建治 4 年 ('78) 1 月 25 日

57 歳

四条金吾

たかとり

岳

ものぶ

岳

七

面

岳

飯

谷

鷹取のたけ、身延のたけ、なないたがれのたけ、いいだに

もう

き

下

萱

根

岩

うえ

ど

うえ

尋

と申し、木のもと、かやのね、いわの上、土の上、いかにたず

そうら

生

そうら

うみ

ね候えども、おいて候ところなし。されば、海にあらざ

和布

やま

茸

ほけきよう

ればわかめなし。山にあらざればくさびらなし。法華経に

ほとけ

成

道

あらざれば仏になる道なかりけるか。

そうら

うけたまわ

清

これはさておき候いぬ。なによりも承つてすずしく

そうら

幾

おん 憎

ひと

ごしゅつし

ひと

数

候ことは、いくばくの御にくまれの人の、御出仕に人かず

召具

たま

いちにちふつか

おん 隙

にめしぐせられさせ給いて、一日二日ならず御ひまもなき

由 もう

右衛門 大 夫

親

よし、うれしさ申すばかりなし。えもんのたゆうの、おやに

た 合 かみ おんひとこと

返

許

との

立ちあいて上の御一言にてかえりてゆりたると、殿の

数 年 あいだ 憎

こ ぞ

冬

聞

すねんが間のにくまれ、去年のふゆはこうとききしに、か

ひ び ごしゆつし おん 供

てん

えりて日々の御出仕の御とも、いかなることぞ。ひとえに天

おんはか ほけきよう おんちから

の御計らい、法華経の御力にあらずや。

う え えんぎようぼう きた そうら もう そうろう

江 間

その上、円教房の来つて候いしが申し候は「えまの

しろうどの ごしゆつし おん 供 侍 にじゆうし ご

なか

四郎殿の御出仕に御とものさぶらい二十四・五、その中に

主 主 背 顔

しゆうはさておきたてまつりぬ、ぬしのせいといい、かお

魂

馬

げにん

なかつかさ

左衛門

尉

だいいち

たましい、むま・下人までも、中務のさえもんのじよう第一

男

鎌

倉

童

部

なり。あわれ、おとこや、おとこやと、かまくらわらわべは、

辻路

もう

合

そうら

語

そうろう

つじちにて申しあいて候いし」とかたり候。

怪

そうろう

こうし

きゅうしいちげん

これにつけても、あまりにあやしく候。孔子は九思一言、

しゅうこうたん

よく

とき

さんど

握

しよく

とき

さんど吐

たも

周公旦は浴する時は三度にぎり、食する時は三度はかせ給

いにしえ

けんじん

いま

ひと

鏡

こんど

う。古の賢人なり、今の人のかがみなり。されば、今度は

殊み

慎

たも

夜

ことに身をつつしませ給うべし。よるは、いかなることあり

ひとり外

い

たも

かみ

おん召

とも、一人そとへ出でさせ給うべからず。たとい上の御めし

あ

げにん

御所

遣

内

々

いちじよう

聞

有りととも、まず下人をこそへつかわして、ないない一定をき

定

腹

卷

着

鉢

卷

せんごそう

ひと

きさだめて、はらまきをきて、はちまきし、先後左右に人を

立

しゅつし

ごしよ

傍

こころ 寄

館

わ

たてて出仕し、御所のかたわらに心よせのやかたか、また我

館

脱 置

参

たも

いえ

帰

がやかたかにぬぎおきて、まいらせ給うべし。家へかえらん

先

ひと

い

戸

脇

橋

下

厩

には、さきに人を入れて、とのわき、はしのした、むまやの

後

高

殿

いつさい

暗

見

い

しり、たかどの、一切くらきところをみせて入るべし。

焼

亡

わ

いえ

ひと

いえ

財

しようもうには、我が家よりも人の家よりもあれ、たからを

惜

慌

ひ

消

寄

おしみてあわてて火をけすところへつつとよるべからず。ま

はし

い

しゅつし

しゅ

おん

供

おん

帰

して走り出ずることなかれ。出仕より主の御ともして御かえ

とき

御 門

うま

下

暇

差

合

由

りの時は、みかどより馬よりおりて、いとまのさしあうよし、

傍官もう急帰かみ仰

ぼうかんに申して、いそぎかえるべし。上のおおせなりとも、

夜いおん供ごしよ久帰

よに入つて御ともして御所にひさしかるべからず。かえらん

だいいちこころ深用心必

には、第一心にふかきようじんあるべし。ここをばかならず

敵窺ひと酒給もう

かたきのうかがうところなり。人のさけたばんと申すとも、

怪出もち

あやしみて、あるいは言をいだし、あるいは用いることな

かれ。

おん弟つね不便由

また御おとどもには、常はふびんのよしあるべし。つ

湯銭草履値こころ

ねに、ゆぜに・ぞうりのあたいたんと心あるべし。「もし

こと敵許わ命

やの事のあらんには、かたきはゆるさじ、我がためにいのち

をうし失なわんずる者ぞかし」とおぼ思して、とが失ありとも、

しょうしょう少々の失をばしらぬようにてあるべし。

おうな 類

とが

いつこう

ご

教

訓

また女るいは、いかなる失ありとも、一向に御きようくん

諍

ねはんぎよう

までもあるべからず。ましていさかうことなかれ。涅槃經に

い つみきわ

おも

によにん

およ

とううんぬん

云わく「罪極めて重しといえども、女人に及ぼさず」等云々。

もん こころ

とが

おうな

失

行

文の心は、いかなる失ありとも女のとがをおこなわざれ、

けんじん

ぶつでし

もう

もん

もん

これ賢人なり、これ仏弟子なりと申す文なり。この文は、

あじやせおう ちち こころ

はは

過

とき

阿闍世王、父を殺すのみならず、母をあやまたんとせし時、

ぎば がっこう りようしん

諫

きようもん

わ

はは

こころ

苦

耆婆・月光の両臣がいさめたる経文なり。我が母、心ぐる

思

りんじゅう

こころ

懸

妹

しくおもいて臨終までも心にかけてしいもうとどもなれば、

とが

免

ふびん

はは

こころ

安

こうよう

失をめんじて不便というならば、母の心やすみて孝養とな

深

思

るべしとふかくおぼすべし。

たにん

ふびん

況

弟

他人をも不便というぞかし。いおうや、おとうとどもを

こと

あ

いっしょ

や。もしやの事の有るには、一所にていかにもなるべし。

留

居

歎

思

出

これらこそ、とどまりいてなげかんずれば、おもいでにと

深

思

もう

たじ

すぐろく

ふかくおぼすべし。かよう申すは、他事はさておきぬ、双六

ふた

いし

掛

とり

ひと

はね

飛

は二つある石はかけられず、鳥は一つの羽にてとぶことなし。

まさかど

貞

任

勇

将

ひとり

かな

将門・さだとうがようなりしゆうしようも一人は叶わず。さ

しやていとう

こ

ろうどう

打

頼

れば、舎弟等を子とも郎等ともうちたのみておわせば、もし

ほけきよう

広

たま

よ

たま

ひとかた

や法華経もひろまらせ給いて、世にもあらせ給わば、一方の

方人

かとうどたるべし。

京

内裏

いん

御所

鎌

倉

ごしよ

すでにきようのだいり、院のごそ、かまぐらの御所なら

おん後

見

ごしよ

いちねん

うち

にど

しょうがつ

じゅうにがつ

びに御うしろみの御所、一年が内に二度、正月と十二月と

焼

そうら

ただごと

ほうぼう

しんごんしとう

にやけ候いぬ。これ只事にはあらず。謗法の真言師等を

おんし

恃

たも

うえ

ほけきよう

怨

そうろう

御師とたのませ給う上、かれら法華経をあだみ候 ゆえに、

てん

責

ほけきよう

じゅうらせつ

おん

諫

天のせめ、法華経・十羅刹の御いさめあるなり。かえりて

だい懺悔

辺

甚

大さんげあるならば、たすかるへんもあらんずらん。いとう

てん くに 惜 たも おお おん 諫

天のこの国をおしませ給うゆえに、大いなる御いさめある

たこく くに 打 卷 こくしゆ くにたみ うしな

か。すでに他国がこの国をうちまきて国主・国民を失わん

うえ ぶっしん じしやひやくせんまん 滅 てんげん み

上、仏神の寺社百千万がほろびんずるを、天眼をもつて見

お 歎 たも ほけきよう みな

下ろしてなげかせ給うなり。また法華經の御名をゆうゆう

者 とな ひぼうしようほう もの 脅 そうろう

たるものどもの唱うるを誹謗正法の者どもがおどし候

てん 憎 たも ゆえ ことし

を、天のにくませ給う故なり。あなかしこ、あなかしこ。今年

賢 もの ご 覧 さんかいこうし 免

かしこくして物を御らんぜよ。山海空市まぬかるるところ

行 ことし 過 あし だせんにな ほとけ う

あらば、ゆきて今年はすぎぬべし。阿私陀仙人が仏の生ま

たま み 惜

れ給いしを見て、いのちをおしみしがごとし、おしみが

きようきようきんげん

ごとし。恐々謹言。

しょうがつにじゅうごにち

正月二十五日

なかつかさのさえものじょうどの

中務左衛門尉殿

にちれん

日蓮

かおう

花押